

体験型教育プログラムとしての「野外活動実習」が 大学生の自己概念に及ぼす影響

著者	長谷川 望
雑誌名	東邦学誌
巻	42
号	2
ページ	143-150
発行年	2013-12-10
URL	http://doi.org/10.20728/00000326

体験型教育プログラムとしての「野外活動実習」が
大学生の自己概念に及ぼす影響

長谷川 望

愛知東邦大学

体験型教育プログラムとしての「野外活動実習」が 大学生の自己概念に及ぼす影響

長谷川 望

目次

1. はじめに
2. 「野外活動実習」の概要
3. 方法
 - 3-1 調査対象者
 - 3-2 調査時期
 - 3-3 調査内容
4. 結果
5. 考察
6. まとめ

1. はじめに

現代の大学生は、人間関係の希薄化やコミュニケーションスキルの低下など、社会的な要因を背景に孤独感や疎外感を強く感じる傾向にあり、対人ストレスへの耐性が低く、人間関係でのつまづきを起因とした心の問題を増加させているといわれている。独立行政法人日本学生支援機構は、2007年度「大学における学生相談体制の充実方策について」において、大学は、個別性と多様性に配慮しつつ、教育的・成長促進的視点に立った的確な支援をすることが求められるとしている¹⁾。こうした現状から、開発的教育や教育カウンセリングの持つ概念が、予防的な発想からアプローチを行うという意味において注目されている¹¹⁾。そのような観点から、清水(2010)は、プロジェクトアドベンチャー(Project Adventure:以後PAと略記)を導入した野外教育活動が「社会的・心理的な発達促進」「対人関係の支援教育」を提供する可能性を秘めているとしている¹¹⁾。

野外教育においては、体験学習理論を用いた学習サイクルをモデルとし重要視されており、単なる知識・技能の獲得にとどまるものではなく、学習者の興味や経験をもとにした主体的な思考活動を中心に展開されるところにその特徴があるといわれている。その野外教育プログラムにおいては、グループダイナミクスの理論を取り入れた心理学的なアプローチを特徴としており、自然への理解を深めながら人間関係や自己概念の向上などに重点を置いている¹⁰⁾。学習者は、自分の身体や技能を駆使して優しい課題から困難な課題へと挑戦していく。その過程でつまづきなが

ら、自分の殻を破り、自己の能力に挑み、工夫し、仲間と協力しながら、課題を達成していくのである。

そこで、本研究においては、体験型教育プログラムである「野外活動実習」が大学生の自己概念に及ぼす影響を検討することを目的とした。そのうえで、今日の国際化、情報化、ユニバーサル化、全入時代等に直面している大学教育としての野外教育、大学教育以前の教育の視点から教員養成としての野外教育について考察することとする。

2. 「野外活動実習」の概要

2007年度、愛知東邦大学人間学部において、地域の人々の生活と暮らしの充実を支える人材育成、そして人間の学際的学問分野を学修することで専門性と現実的対応性を兼ね備え、真に地域に役立つ「生きる力のある人間」を育成することを目的とし人間健康学科が設置された。人間健康学科においては、「健康」をキーワードにあらゆる年代の人間が心身ともに健やかに暮らしてゆくための方法やシステムの取得を目指す者。心理や福祉についての理解も含め、人々のよりよいライフスタイルを創造できる人材を目指す者。を育成することをアドミッションポリシーとして掲げている。そのような人材育成を実現するための1年次の導入教育としては、「基礎演習Ⅰ・Ⅱ」を中心に、大学生活における基本的な態度、基礎学力の向上、学生間及び学生と教員間の人間関係の構築を目的にカリキュラムが構築された。「野外活動実習Ⅰ」においては、事前の準備から学生が主体的に取り組み、協力をし、実体験を通してさらなる人間関係を構築することを目的とされている。また、将来人と関わる仕事を目指す学生への動機づけを高め、学生リーダーの育成を図るとされている。2年次以降は、人間学学士を目指す学生の学士力を保証するために、豊かな教養と専門性を身につけるべくカリキュラムが構築されている。

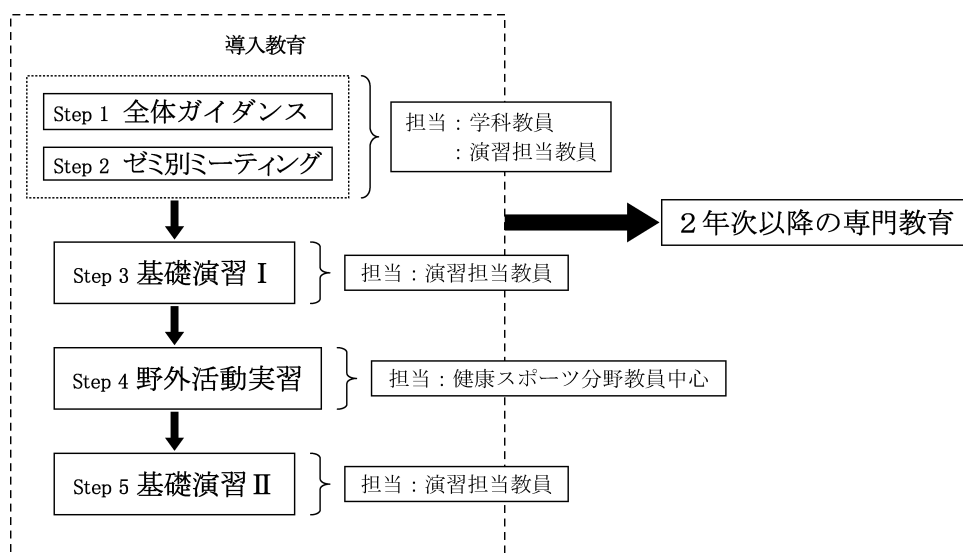


図1. 人間健康学科導入教育のプログラム (2010年度入学生まで適用)

現代の野外教育プログラムや冒険教育が理論的背景としている「体験学習理論」は、社会心理学のグループダイナミクス研究の創始者であるレビンらにより始められ、さらにTグループという体験学習に引き継がれ、その後米国におけるNLT研究所（National Trainig Laboratories）からTグループ研究へと発展した経緯がある。それは、“社会的感受性とコミュニケーションスキルの開発”や“リーダーシップの理解と実践のためのトレーニング、“組織開発”などへの応用教育プログラムとして展開されたとされている¹⁰⁾。本学の「野外活動実習」においても、体験学習理論を用いた学習サイクルをモデルとし重要視されており、単なる知識・技能の獲得にとどまるものではなく、学習者の興味や経験をもとにした主体的な思考活動を中心に、カリキュラムが構築され、実習においてはプログラムが展開されている。（図2、表1）

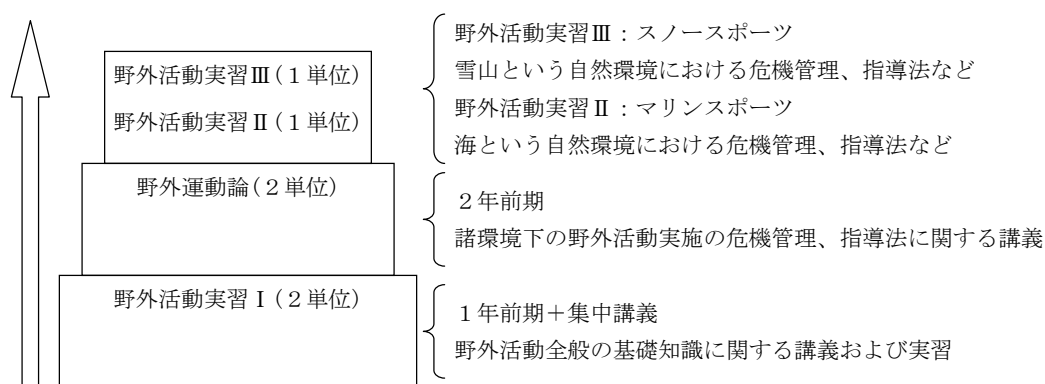


図2. 段階的な体験型教育プログラム（2010年度入学生まで適用）

表1. 「野外活動実習」 2泊3日のプログラム

日程	主なプログラム
1日目	開村式、アイスブレイク、野外炊飯、夕べの集い、レクリエーション、振り返り
2日目	朝の集い、軽登山、野外炊飯、夕べの集い、キャンプファイヤー、振り返り
3日目	朝の集い、イニシアティブゲーム、片づけ、閉村式、振り返り

3. 研究方法

3-1 調査対象者

愛知東邦大学人間学部人間健康学科の導入教育プログラムであり、全員履修科目である「野外活動実習Ⅰ」を受講した200X年度入学生103名を対象に授業内において、集合調査法より調査を実施した。そのうち、学外実習に参加し、誤回答やデータに欠損があるものを除き、91名（男性72名、女性31名）を分析対象とした。

3-2 調査時期

200X年8月下旬に行われた、前期の最終講義及び、9月中旬に行われた「野外活動実習Ⅰ」事後ガイダンス時に実施した。

3-3 調査内容

自己成長性検査

竹之内（2004）が作成した大学生用の自己成長性検査を用いた¹²⁾。自己成長性検査は、自己概念に関わる自己形成及び自己実現に関する態度や意欲を測定するものであり、31項目、4因子（劣等感、向上意欲、自尊心、自己受容、）から構成されたリッカート式の質問紙である。得点化に際しては「非常にあてはまる」5点から「全くあてはまらない」1点とした。

4. 結果

自己概念の変化

「野外活動実習」前後の自己概念得点の変化を検討するために分析を行った結果、有意な差は認められなかった（n.s.）。

また、因子ごとの比較をするために、分析を行った結果、向上意欲において、有意な差が認められた（ $p<.05$ ）

表 2. 自己概念及び下位因子得点（ $n=91$ ）

	実習前		実習後		p
	M	SD	M	SD	
劣等感	41.12	7.79	41.69	8.18	n.s.
向上意欲	35.43	4.80	36.19	4.38	*
自尊心	16.77	2.99	16.81	2.96	n.s.
自己受容	16.41	2.48	16.13	3.14	n.s.
自己概念	109.73	11.19	110.82	11.42	n.s.

*; $p<.05$

さらに、自己概念が低い学生の変化を検討するために、GP分析を行い自己概念低群、自己概念高群に分類した。自己概念の低群において「野外活動実習」前後の自己概念の比較をした結果、低群の自己受容得点が有意に向上したことが明らかになった（ $p<.01$ ）。

表3. 低群における自己概念及び下位因子得点 (n=23)

	実習前		実習後		p
	M	SD	M	SD	
劣等感	44.17	4.99	43.00	6.35	n.s.
向上意欲	33.96	5.17	34.43	5.90	n.s.
自尊心	16.22	2.70	16.30	2.74	n.s.
自己受容	12.04	1.92	14.39	2.23	**.
自己概念	106.39	10.56	108.13	11.83	n.s.

** ; p<.01

5. 考察

自己概念を構成する因子のうち「向上意欲」が高まったという点について、飯田ら（1988）は、冒険教育プログラムの研究は、自然環境の中で危険をとまなうような冒険的野外活動を通じて、様々な困難やストレスを体験し、ストレスを克服することによって成功体験を味わい、成功体験の蓄積により自己概念の向上がもたらされるという前提に立っているとしている²⁾。本研究の対象者においても、体験型教育プログラムとしての「野外活動実習」を通じて自分にできることを発見したり、他人と比較したりして新たな自分を知る機会が提供されたことや、学生達が仲間との集団行動や課題を達成するという成功体験を積み重ねていく中で「向上意欲」が高まったと考えられる。つまり、成功体験を重ねていく上で、次も成功したい、協力して達成したいという向上意欲が高まったと考えられる。すると、本研究の「野外活動実習」を経験した学生が、先行研究と同様の結果が得られたことは、大学生を対象としたプログラムの評価とも捉えることができる。

自己概念低群において、向上が認められた「自己受容」について、宮沢（1988）は、①自己理解（自己の諸側面をありのままに受け容れ、自己に冷静な目を向け、自己認識していること）②自己承認（現在の自己を否定せず、自己をそのまま承認して受け容れること）③自己価値（自己を無価値な存在としてみたり、無意味感を持つことがなく、自己の人間的な価値を疑わないこと）④自己信頼（現在および将来の自己の可能性を信頼し、人生や物事に対する対処能力に自信を持つこと）で構成されているとしている⁵⁾。先述の通り、現代の大学生は、人間関係の希薄化やコミュニケーションスキル低く、対人ストレスへの耐性が低いといわれているが、本研究対象のうち、自己概念の低い者においては、「野外活動実習」を通して、自分を受け入れ、仲間と協力して課題を解決するという過程で「自己受容」し、課題解決に向かい多かれ少なかれストレスを乗り越え主体的に行動ができたと考えられる。

文部省（現文部科学省）は、1996年の中央教育審議会第一次答申「21世紀を展望した我が国の教育のあり方について-子どもに「生きる力」と「ゆとり」を-」において、「生きる力」の育成を重視し、社会体験、自然体験、生活体験の重要性を指摘している。「生きる力」とは、「いか

に社会が変化しようと、課題を自ら見つけ、自ら学び自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質・能力でありまた、自らを律しつつ、他人とともに協調し他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性であり、そしてまた、たくましく生きていくための健康な体力である」と定義されている⁶⁾。また、その答申において、家庭教育の充実や地域社会における教育の充実方策として自然体験の活性化、長期間の自然体験活動の充実が掲げられている。その後、文部科学省は、2008年3月28日に学校教育法施行規則の一部改正と中学校学習指導要領の改訂を行い、2012年度より新中学校学習指導要領は全面的に実施されている。その新学習指導要領の内容の取扱いにおいて、地域や学校の実態に応じて、スキー、スケートや水辺活動（野外活動）を加えて指導するとともに、能率的で安全な集団として行動の仕方（集団行動）を各領域において行うこととしており、自然体験活動の充実が強く打ち出されている^{7) 8)}。そのことを、考慮すると十分に検討された体験型教育プログラムとしての「野外活動実習」は、自己概念を向上させるため、初等教育や中等教育において体験させることが重要となると考えられる。

6. まとめ

体験型教育プログラムとしての「野外活動実習」が部分的ではあるが、大学生の自己概念を高めることが示された。このことは、人間関係の希薄化やコミュニケーションスキルの低下、社会的な要因を背景に孤独感や疎外感を強く感じる傾向、対人ストレスへの耐性が低く、人間関係でのつまづきを起因とした心の問題を抱えている学生が多いという、大学教育の現状において非常に意義のあることである。また、初等教育や中等教育においても重要な意味を持ち、その教育に関わる人材を育成する教職課程を持つ高等教育機関において、体験型教育としてカリキュラムに位置付けることも大変意義のあることである。

参考文献

- 1) 独立行政法人日本学生支援機構 2007 大学における学生相談体制の充実方策について－「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」－独立行政法人日本学生支援機構
<http://www.jasso.go.jp/gakusei_shien/documents/jyujitsuhausaku.pdf> (アクセス日：2013年9月29日)
- 2) 飯田稔・井村仁・影山義光 1988 冒険キャンプ参加児童の不安と自己概念の変容 筑波大学体育学系紀要 11、79-86.
- 3) 粥川道子・杉岡品子・青木康太郎 2011 教員養成課程における「野外活動実習」の実践報告、北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要、第2号、77-90.
- 4) 小森伸一 2011 野外教育の理論の再考Ⅱ：その特性：基本構造（構成基礎要素：教材・教育の場・教育方法）の観点から、東京学芸大学紀要、第63巻、31-44.
- 5) 宮沢秀次 1997 女子中学生の自己受容性に関する縦断的研究、教育心理学研究、36(3)67-72.
- 6) 文部省 1996 中央教育審議会第一次答申「21世紀を展望した我が国の教育のあり方について－子どもに「生きる力」と「ゆとり」を－」文部省（現文部科学省）
<http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/960701x.htm> (アクセス日：2013年9月25日)
- 7) 文部科学省 2008 中学校学習指導要領解説「保健体育編」、東山書房：東京
- 8) 文部科学省 2008 高等学校学習指導要領解説「保健体育編・体育編」、東山書房：東京

- 9) 西島大祐 2008 キャンプ実習に関する意識調査－教員養成大学カリキュラムにおける授業実践を通して、鎌倉女子大学紀要、第16号、79-86.
- 10) 佐藤豊・佐野裕 2004 高等学校における野外教育のあり方を求めて－「総合的な学習の時間」の活用－、横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅰ、教育科学 6、101-119.
- 11) 清水安夫 尼崎光洋 煙山千尋 宮崎光次 武田一 川井明 2010 大学体育における野外教育活動の可能性の検討－プロジェクトアドベンチャー・プログラムを導入したキャンプ活動におけるリーダーシップ及びフォローアップの養成－、大学体育 7、25-39.
- 12) 竹之内隆志 2004 スキー実習による自己概念の変容－有効な方略の検討、スポーツ心理学研究、37(1)、49-59.

受理日 平成25年9月30日